

張旅軒と伊藤仁斎の道・道徳論比較

嚴錫仁（倫理研究所専門研究員）

はじめに

本稿は、朝鮮時代の儒学者の張旅軒（1554～1637）と江戸時代の伊藤仁斎（1627～1705）の思想、なかんずく「道」をめぐる見解を中心として人間観・道徳論を比較考察し、彼らの思想的特質を明らかにしようとする試みである。

ところが、ここで比較考察を行うといったものの、実は、この両学者は儒学者としての生を営為したというきわめて漠然とした共通分母を除けば、それ以上何の接点も持っていない。違う時・空間のなかで、相手の存在を認知していたという証拠もなく、思想的な立場においても、旅軒は朱子学者として、仁斎は反朱子学者としての生を生きていた。むりやり二人の間の接点を探そうとすれば、李退溪（1501～1570）を挙げることができるが、それも否定的な媒介でしかない。つまり、旅軒は彼の学統において鄭寒岡（1543～1620）を通して李退溪と広い意味での師承関係にある。仁斎は断片的な言説であるが、李退溪の『朱子書節要』にみえる朱子の弟子の楊子直に対する退溪の評価を指摘して、「（退溪は）見識がなく、朱子の門人達を自分勝手に解釈している」というような批判を残している。

にもかかわらず、両学者の思想営為を同一線上で取り扱おうとしたのは、彼らの思想の対称的な立場は、互いが互いの思想的特質を照らしてくれる鏡の役割をし、さらには儒学・朱子学を日・韓のそれぞれの立場において理解し深化していく日本的儒学、韓国的儒学の特質を象徴的にあらわしているのではないか、と考えるからである。もう少し具体的に、両学者の比較考察を可能にする、いくつかの土台を挙げておこう。

第一に、旅軒と仁斎は、朝鮮時代と江戸時代の儒学史において、各地域の朱子学の受容と理解がある程度成熟した後に登場して、それを彼らの観点で再整理したという点である。旅軒は、退溪学と栗谷学（退溪学の対蹠点に立って朝鮮儒学のもう一つの特徴を示している）の主張を経験しながら、「経緯論」、「体用論」などとして、朱子学と朝鮮儒学の論点を改めて提示した、言い換えれば、彼の時代において新しく朱子学の総合と整理を遂行した学者であるという評価を受けている。仁斎は、藤原恨窩（1561～1619）、林羅山（1583～1657）、山崎闇齋（1618～1682）などの朱子学の受容と研究によって展開された江戸儒学の流れのなかで、朱子学との葛藤・克服を通して孔孟の原始儒学に戻っていくという「古義学」を標榜し、天道・理気・性・道心などの重要な儒学の概念を新しく再構築した。

第二に、儒学の重要な多くの概念のなかで、共通して「道」を彼らの思想の座標としていたという点である。旅軒は彼の学問の根本課題を「道」の概念に集約させたという評価があり、仁斎も彼の著作の至るところで「道」を強調していた。

第三に、右の「道」と関連して、両学者ともに日用日常に基づいた道徳論に格別な関心を示したという点である。旅軒は、丙子胡乱と李适の乱などの内・外乱によって秩序が崩れてしまった時代のなかで、それを立て直す根本的な対策として道徳と倫理の定立を提示した。仁斎は、後にまた具体的に論ずるが、彼の学問全体が道徳と倫理説に集中しているといつて過言ではない。

もちろん、以上で挙げた比較の土台は、表面的な類似点に過ぎず、彼らの思想の内容まで同じであるということではない。以下、両学者の「道」に対する理解を中心として、それと関わる人間観、道德論に対する主張を比較検討しながら、旅軒と仁齋思想の特質の一端をうかがってみよう。